昭和時代

二・二六事件まで　昭和の歴史には、どのひとこまにも、戦争のかげがおもくるしくおおいかぶさっている。

大正十五年（一九二六年）十二月二十五日、大正天皇が崩御されると、皇太子裕仁親王殿下が皇位をつがれ、世は「昭和」となった。「昭和」とは「百姓昭明、万邦協和」という中国の古典からとったもので、「君民一致、世界平和」をいみするのだと当時の新聞は説明をくわえ、若い新帝の前途を祝福したが、その後の昭和の歴史は、この元号にことよせた意味とは全く反対に、内政の危機と戦争に明け暮れ、そしてついに敗戦となった。当時はそうした未来を知るよしもなかったものの、たしかに一つの時代の転換期にさしかかっていたにちがいない。いまそれをさぐりつつ思い出をつづり合せてみよう。

大正十五年は若槻内閣の成立した年で、そのころ、輸出はのびなやみ、入超は四億四千万円と行きづまり、有名な小説「太陽のない街」で知られている東京小石川の共同印刷争議、労働農民党結成、浜松楽器争議、新潟県木崎村小作争議、日本共産党再建大会、社会民衆党結成、というような記事が新聞を賑わしていた。

このような時代を背景に、一宮町周辺にも小作争議が起り、立入禁止、立毛差押えなどが行われた。そして、争議はしだいに長期化し、大規模になる傾向があった。前年の十四年に制定された治安維持法により、これらの争議を指導したものは検挙されたが、深刻化する不況に激化する闘争はあとをたたなかった。

昭和二年三月から四月にかけて、はげしい金融恐慌がおこり、経済混乱のただ中で若槻内閣はたおれた。これは関東大震災のために、銀行で融資した手形の決済の見とおしがつかなくなっていたので、政府は、これを担保に日本銀行に貸出を命じて経済活動の再開を促進し、その代り、日銀には一億円を限度として損失補償を行なうこととした。しかし、こげつきになっているものもあって、この補償では震災手形の決済はすまされなかった。これらには十カ年年賦で国債を貸付け、その整理をはかろうとした。このような内容の震災手形善後処理法案が国会で審議の際、こげつきとなった銀行の経営内容が論議されると、これをきっかけに各銀行に預金の払戻しが殺倒した。ために東京の二流銀行は続々と休業し、さらにパニックは地方の銀行に波及、これらの銀行の預金者や取引先である中小

商工業者の倒産がはじまった。これらの不況がさらに政治、経済界に重大問題となったのは、台湾銀行が破産にひんしたことである。植民地の金融支配のため政府から特権と保証をあたえられていた特殊銀行だけにその影響は大きかった。

この恐慌によって小さな銀行は経営困難になり資本金百万円以下のものは整理されるに至った。一宮町には当時、第九十八銀行と総武銀行があったが、総武銀行は県内にあった他のいくつかのものと合併して、千葉合同銀行と改名しいまも残っている。

しかしこのように不況が進みつつあったが、いま海岸にある一宮学園ができたのもちょうどそのころである。それは海水浴場、別荘適地として中央の名士が来るようになってから、全国的に有名になり、さらにこれを裏づけするように、時の内務省が恩賜金をもって、関東大震災被災地虚弱児童を収容するためのもので、一宮町が三井八郎、次郎男爵から寄贈された同氏の別荘地約四万平方米を、内務省に寄贈して建設された学園である。このために町は天下一の健康地と宣伝された。避暑、避寒、療養地として沢山の都人士が入込み旅館、貸家、貸間が繁昌するようになった。

元第九十八銀行（現在の役場）

一宮学園ができると内務省は、新一宮橋を架設した。それ以前は新一宮橋より約百米ほど下流に通称「ガタガタ橋」または「木島橋」といわれる木橋がかかっていて通行する都度二銭ずつとられた。これが不便であり危険でもあったとき新一宮橋ができたので、両岸を結び、さらに海岸線に沿った南北の交通が便になった。いまではこの橋の附近は海水浴客のためにいくつかの店舗、旅館などがあって夏期中は賑やかであり、風景もひときは美しくなっている。だが中央においては、台湾銀行の休業につづいて宮内省金庫の十五銀行までが休業のやむなきにいたった。そして田中義一を首班とする内閣が成立した。日銀からの莫大な融資によって、恐慌をひとまずおさめたが、休業銀行は三十七をかぞえ、いままでの中小銀行の預金の大口は大銀行に、小口は郵便貯金に移った。恐慌の波がしずまるとすぐ日本は中国山東省への出兵を決定した。これは中国の革命運動干渉のものであった。このころ一宮町と関係の深い作家の芥川竜之助が自殺した。これは当時としては知識人にはげしいショックをあたえた。階級闘争の激化とせまりくる戦争の危機――この自殺後に、日本の戦争への基本方針を定めた東方会議が開かれており、他の一つは日本共産党の反戦と革命の戦略戦術を確立した二十七年テーゼが決定された。この二つは日本の歴史の方向を示唆するできごとといわれている。

昭和三年には普選による最初の衆議院議員総選挙がおこなわれた。この時に「無産政党」が登場した。この登場はさきに中国山東省に出兵してはかばかしい結果を得なかった中国革命干渉をさらに拡大するためには、この無産政党を放任することは政府、軍部、それを支持するものにはできなく、かつ、危険なものであった。

そして三月十五日未明、一道三府二十七県にわたり、共産党、労農党、評議会、無産青年同盟の関係者千数百名のいっせい検挙をおこない、四月十日には労農党以下三団体を結社禁止した。このあと第二次の山東省出兵が国内の反対論をおしきって遂行された。それは蔣介石の「北伐」が再開されて張作霖の北京政府軍と、交戦しているから居留民の保護が必要であった。そして済南に入城してきた国民軍と衝突して市街戦を起した。これは済南事件といわれている。

張作霖は連戦連敗にあったので、やむをえず満州にむけ引きあげたが、彼ののる特別列車が奉天駅につく直前、爆破されて死んだ。これは満州の排日運動にいっそう油をそそぐことになった。

その後国民は政府批判をしだいに激しくしていったため、これらに対する弾圧は狂暴となった。山本宣治代議士が暗殺されたり、自由主義者、共産党員の大検挙がおこなわれた。田中内閣の人気は地に落ち、国民は方向を見失ない頽廃と享楽の気風が都会を中心にひろまりはじめた。カフェー、ダンス、レビュー、「銀ブラ」「モガ」「モボ」、こうした風俗はとくにこの時期から顕著になった。一宮にも数軒のカフェー、撞球場が開店して、青、赤の電灯をつけ、断髪や七、三の耳かくしの髪を結った女給が現れはじめた。そして大正末の艶歌師のバイオリンに代って蓄音器のレコードによる流行歌、東京音頭などが大勢の人を夜になると集めて踊りにふけるようになった。

このような時に田中内閣はたおれ、浜口雄幸内閣の成立をなんとなく明るい気持でむかえた。年々強まる輸出不振、とくに中国貿易がまったく希望がなく、この苦境をきりぬけるには金解禁をおこなって、為替相場を安定させ、国際水準からいちぢるしく高い商品の値段を引きさげる必要にせまられた。金解禁断行の準備としては財政の緊縮、デフレーション政策であり、産業の合理化であった。

さらに月給百円以上、つまり中級以上の官公吏軍人の一割減俸を発表した。これは首切りに道をひらくためのものであった。これにたいし反対運動はまず司法官に起り、ついで鉄道省、拓務省、商工省にひろがったので、政府はあわててこの案を撤回してしまった。

金解禁は昭和五年一月に実施された。「多年の暗雲ここに一掃され国力進展の秋来る」と新聞は書きたてた。「金解禁ぶし」の鳴物入りで宣伝が行われ国民は朝まだきから日銀におしかけ、十三年ぶりに金貨の触感を味った。だが昭和四年十月から世界は大恐慌に見舞われはじめていた。

この世界大恐慌は日本経済をもその渦中に巻きこまずにはおかなかった。内閣の緊縮政策と金解禁とは恐慌の打撃をいよいよ大きなものとした。このころ「失業都市東京」という小説が書かれ、「大学は出たけれど」という映画がつくられた。失業者は都会で職をさがすあてがなく、やむをえず故郷の農村に帰った。汽車賃のない人

人が、街道ぞいに歩く列がつづき「京海道五十三次は時ならぬ賑わいを呈した」と当時の新聞は報じている。

しかし失業者たちがたどりついた農村はどのような状況であったろうか。恐慌は農業においていっそう深刻であった。一般物価の下落率は前年（昭和四年）にくらべて一割八分であったのに、野菜は四割ないし六割もおち、生産農家の出荷価格は「キャベツ五十個で敷島一つ、蕪は百把でバットが一つ」（敷島は一個十八銭、バットは七銭）と報ぜられるような暴落ぶりであった。そこに十月の米の予想収穫高が未曾有の豊作だとわかると、米価はたちまち大暴落し、いわゆる「豊作飢饉」となった。米価は四割近く下落を示した。前年に一石あたり三十円余であったのに、十八円余となった。そうして全国農家の負債は、農家一戸あたり約七、八百円にのぼったと推定され、それが年々百円ほどずつ増加していった。一般農民は頼母子講、無尽に頼り、あるいは地主、肥料商、米穀商から借金して、高い利子に苦しめられ、米がとれないうちにきわめて安い値段で先売りしてしまう青田売りがさかんにおこなわれた。

ところが翌年の昭和六年には冷害による大凶作となった。豊作でぎりぎりの窮迫に追いこめられていたから、まして凶作ともなればその打撃にたえる力はなく、文字どおりの飢饉となった。

この頃は中学校に入学する者が激減し、教員が生徒募集に戸別訪問を行なう状態であった。また農村をきらって南米に移民として渡るものも多数でてきた。失業救済の事業として道路の改良に、モッコかつぎやトロ押しにでて、賃金どりをするものがふえてきた。当時の手間は男一日五十銭、女子三十五銭くらいであった。政府は資金の融資もやったが、これを借りても返済に困り、土地、家屋の差押、競売が行われた。また自力更生運動を提唱し、産業組合を拡充して「勤倹力行」「隣保相助」を奨励した。この時に農事実行組合や農村負債整理組合ができた。

昭和八年、この組合では「経済更生計画資料申告札」を発行した。青刷のものが貸金、赤刷のものが借金と区分されており、金額も五円、十円、五十円、百円、五百円、千円、五千円とある。それぞれの貸金、借金に応じてこれを切りとらせて申告させたものらしい。この申告により、組合は融資、返済などの相談にのる目安にしたものであろう。

またザラ紙一枚に大きな赤い活字で「自力更生は肥料の自給から」と印刷したビラには、いまの農家経営とはまるで違ったものが書き込まれているのでここにあげておこう。

「農業恐慌」…で農家の収入は半分にも三分の一にも急減してしまいましたのにかかわらずその支出は中々減らないばかりか農家現金支出の最大部分をなす

「金肥最近の暴騰」…は実に驚くばかりで硫安の価格の如きはここ数ヵ月の中に八、九割も騰貴し、その他金肥も漸騰するため農家は益々苦しくなるばかりです

「自給肥料（てまごえ）と金肥」…の施用の割合は最近の調査によりますと自給肥料は四割五分、金肥は五割五分になっておりますが、この苦境を切りぬけるにはどうしても

「自給肥料の増産」…を断行し自給肥料の施用量をできるだけ増加するように心掛けて

「地力維持増進」…を図るとともに多少の農産物の値とりに気を許すことなく

「金肥の節約」…をあくまで実行し自給肥料を基本として、金肥の施用は自給肥料で足らぬところを補う程度に止めましょう

自給肥料の増産を図れ

一　緑肥を作れ―紫雲英、青刈大豆、ザートウキッケン、ルーピン、セラデラ等の緑肥作物を水田裏作として、又桑園、果樹園及茶園等の間作として栽培し根瘤菌の利用をはかりましょう

一　野菜及藻類の利用に努めよ―原野畦畔の草類、山林の下草、落葉及湖沼の藻類等を差支無きかぎり採取利用しましょう

一　廃物を利用せよ―人屎尿、塵芥、泥土、蚕糞、蚕沙、鶏糞、草木灰を利用しましょう

一　速成堆肥を作れ―小麦稈、落葉等のような腐熟し難いものは最近農林省農事試験場で研究せられた速成堆肥製造方法を応用して速成堆肥を作りましょう

一　厩肥の利用増進を図れ―有畜多角農業経営を行いよって生産せられる厩肥の取扱に注意してその利用増進を図りましょう

「農家経済更生」…は国の基此非常時に手を取り合って努め励みましょう

このように非常時という呼びかけをしているところからも、当時の不況がうかがえよう。したがって、一宮公会堂で行われた芝居や映画（無声で活弁という説明者がついたもの）などは、木戸銭が払えず不入りであった。ラジオも二十%という普及率で、放送もいまのように休みなくやるのでなく、一つの番組が終ると次の放送は何時からですとお休みになってしまい、その放送の内容は、すべて政府の検閲を経なければならなかった。

いわば希望のない、混乱の時代であった。かかる国内情勢に呼応するかのように、朝鮮では日本人中学生が朝鮮人中学生を侮辱したことからおこった衝突にたいして、全朝鮮の中学生と女学生が抗議運動にたち上った。憲兵と警察の徹底的な弾圧が行われたが、民衆はこれに屈しなかった。そして朝鮮釜山紡績工場で女工二千人がストライキにたち上ったほか、京城、平壌、元山などで労働者のストライキは警察との流血の斗争をくりひろげた。

台湾でも同じように労働者、農民の闘争がかたまり、日本の統治政策に反対する動きは原住民の間にもあらわれた。殊に霧社の原住民一千五百人が武装して暴動をおこし、陸軍部隊と飛行機の出動によってようやく鎮定するという事件が起った。

こうした動きにつれて軍国主義をすすめる軍部、官僚勢力の地位と役割とが大きくなった。大恐慌、不況の中で軍需工業は政府から優先的な保護をうけ中島飛行機、三菱航空機、川崎造船、石川島飛行機の各社はせりあいながら、国産の軍用飛行機を作りはじめ、さらに戦車や高射砲などの近代兵器の国産も可能になっていった。ま

た労働運動、農民運動とは別に大日本国粋会、大日本正義団、赤化防止団、七生社などの「国体擁護」を主張する団体も生れた。

ちょうど鉄道大臣の小川平吉らの五私鉄疑獄事件、天岡賞勲局総裁らの政財界の多数が勲章授与をめぐって贈収賄した売勲事件、前朝鮮総督陸軍大将山梨平造の釜山取引所問題、前警視総監宮田光雄の和歌山遊廓疑獄事件等々が起ったのもこの時代である。

その後にロンドン軍縮条約の批准をめぐって、統帥権の独立を強調し国防の危機を説くことから愛国社の佐郷屋留雄は、東京駅頭で浜口首相を狙撃して重傷を負わせた。その後容態の悪化により、若槻礼次郎を首班とする内閣が成立した。

若槻内閣によって戦争準備はいよいよテンポをはやめた。満州にあって万宝山事件が起り、さらに中村大尉事件がおこされた。そして満蒙は日本の生命線であり、それが危機に瀕しているという宣伝が一般の新聞紙上にあらわれはじめた。

昭和六年九月十八日夜十時すぎ奉天北郊柳条溝で、満鉄線路が爆破されたという理由で、爆発事件の一時間後には、長春、公主嶺、四平街、奉天など満鉄沿線主要都市の中国軍にたいし、日本軍はいっせいに攻撃を開始した。いわゆる「満州事変」がはじまった。

事変が始まると若槻内閣の緊縮政策と協調外交の看板はじゃまになった。そして十二月総辞職した。こうして犬養毅が内閣を組織し、金輸出再禁止を断行した。インフレーション政策への転換がはかられるとともに対外政策においても積極方針がとられはじめた。こうして、昭和七年一月には、日本人僧呂が殺されたのを理由に、居留民保護の名目で艦隊と陸戦隊が上海に増派された。上海の周辺で戦闘がはじまった。いわゆる上海事変が起った。義勇軍の強力な抵抗にあい非常な苦戦におちいった。政府は陸軍大部隊を派遣し、攻撃を再開した。クリーク地帯で進出ができなく、損害は莫大になった。肉弾三勇士の美談がつくられ新聞雑誌をあげて宣伝された。五月になって停戦協定が成立して陸軍が撤退した。この頃満州では清朝の廃帝溥儀を執政とし、地方軍閥の頭目たちを重要位置にすえた満州国が成立した。

この間に国内では衆議院議員の選挙中に、民政党選挙対策委員長の井上準之助蔵相が、つづいて三井合名理事長の団琢磨が、いずれも茨城県の青年に射殺された。これは一人一殺主義で元老、重臣、財閥、政党の巨頭を暗殺を企図する血盟団であった。

さらに五月十五日には朝まだき海軍将校を中心とした一団が首相官邸を襲い犬養老首相を射殺した。また別動隊は牧野内大臣邸や警視庁にも手榴弾を投げ、変電所も襲撃した。この五・一五事件は軍部内閣を樹立して軍国主義体制を施くことを目的としたものであった。

そして五月二十二日ようやく海軍大将斉藤実を首班として、農相に後藤文夫、陸相に荒木貞夫、蔵相に高橋是清、内相山本達雄という、いわば政党、官僚、軍部の合作内閣であった。そして九月、日本は「満州国」を承認した。

翌年の昭和八年三月に日本は国際連盟を脱退した。これと併行して軍事行動はさらにすすんで長城線に達し、ついで五月には華北に

侵入して北京、天津に迫った。国内では重化学工業が急速に発展した。さらにこのような日本の軍国主義化に大きな力を発揮したものに「赤化」教員の検挙、追放があった。その関係教員数七六一名、関係地方一道三府三十七県におよんだ。この教育統制は大学にまで及んだ。かの有名な京大教授滝川幸辰を休職処分にしたことから大学自治擁護運動が起った。

また当時共産党の指導者として知られていた佐野学と鍋山貞親が、控訴公判の最中に、獄中から突如「転向声明書」を出した。これはそのつぎに転向を表明したものが多くでてきて、いわゆる転向時代となった。これは当時の知識人にはショックであり、後退に拍車をかけたものであり、さらにファシズムの勢力を勝利せしめるに大きな役割をもったものである。

昭和九年七月には帝人事件によって斉藤内閣は総辞職した。これは金融恐慌で破産した鈴木商店の整理によって台湾銀行の担保となった帝人株中十万株の買受をめぐる贈収賄容疑で、これが閣内に波及したためであった。

このあと岡田啓介内閣ができた。この頃はすでに「満州ブーム」はゆきづまりを見せ、世界の各国との貿易には関税障壁は強化され、中国の日貨ボイコットにより輸出減少は容易に回復しなかった。このような状況のうちで軍需産業の発展には、蟹山漁村に関する費目を大幅に削るか、大衆課税に出るかしなければならなかった。軍備の拡張と国民生活との対立がおのずと明らかになってきた。この国民の不満を反映して、既成政党はしだいに息を吹きかえし、議会にも軍部批判の言論があらわれだした。この頃、美濃部達吉の天皇機関説問題がおこった。自由主義的評論家として治安維持法に反対し、またロンドン条約締結にからむ総帥権問題にさいしては、軍会部批判の立場を明らかにしていた。政府は美濃部の著書「憲法撮要」を発禁にし、国体明徴声明を行ない、不敬罪として告発され、貴族院議員をやめるということで起訴猶予となり、問題はようやく収拾された。

しかし天皇機関説問題は上層部の暗闘を一そう激化させるきっかけとなった。これは陸軍部内の皇道派と統制派の青年将校は当時の真崎教育総監の罷免は元老、重臣、官僚、財閥と結托した統制派、とくに永田鉄山軍務局長の陰謀であるとして、皇道派の相沢中佐は白昼陸軍省内で永田局長を斬殺した。このような陸軍部内の対立抗争に対して軍首脳部はなんらの処置をとることもできなかった。青年将校の不満が自分たちに向けられることをおそれた軍首脳部は軍事費増額のみを強硬に要求し、さらに華北侵略をおしすすめるようになった。

こうして冀東防共自治政府を作り、河北、チチハル両省を管轄する冀察政務委員会を設置させて、華北を支配下におく工作をいそいだ。

昭和十一年二月二十六日早暁、歩兵第一、第三連隊、近衛歩兵第三連隊等二十二名の青年将校は千四余名の下士官、兵をひきいて反乱をおこし、首相、蔵相、内大臣、侍従長、教育総監の官私邸、警視庁、朝日新聞社を襲い、内大臣斉藤実、蔵相高橋是清、教育総監

渡辺錠太郎の諸氏を殺し、侍従長鈴木貫太郎氏を傷つけた。反乱部隊は首相官邸、議会、陸軍省、参謀本部をふくむ永田町南部を占領した。

この事件を二・二六事件という。この事件直後から軍部は、政治にたいする発言権を一挙に増大させていった。

この事件によって岡田内閣は倒れ、広田弘毅が組閣することになった。また軍部の要求であった「国防強化」「国体明徴」「国民生活安定」「外交刷新」の四大国策を全部うけいれた。そして軍部大臣現役武官制を復活させた。

当時の一宮町は二月二十六日朝は少量の降雪があって、朝からラジオの放送はなく不思議にしていた。そのうち一宮駅に憲兵が来て、乗降客を監視しているというので一層不思議になった。正午近くになっていろいろと情報が入り、東京で軍部の反乱の起ったことがわかり、憲兵の来ていたのは斉藤実、平沼騏一郎別邸の警戒のためであることがわかった。この時、郷土出身兵士の多い佐倉五十七連隊が反乱鎮圧に出動したので、どうなることかと心配された。

日支事変　昭和十二年一月、代議士斉藤隆夫、浜田国松の両氏は軍部の政治推進力が強く頭をもたげてきた政治上の弊害を攻撃して時の陸相寺内寿一大将にせまった。物価の騰貴と大衆課税によって国民生活は圧迫されていたので、軍部は、議会における批判はその背景である国民の声と直感して極度におそれた。寺内陸相は二代議士の発言をきっかけとして政党の懲罰を主張して解散を要求したので、ついに広田内閣は総辞職のやむなきにいたった。そして宇垣一成大将に後継内閣の組閣が命ぜられたが、陸軍部内の猛烈な反対にあって、組閣を断念した。つづいて林陸軍大将が組閣にあたった。「敬神尊皇の大義」「祭政一致」にはじまる復古調の濃い施政方針を声明した。なお前年に結んだ日独防共協定によって、東西のファシスト国家が互に結び合い戦争への道の重大な歩みを固めた。その第一歩を蒙古へと軍事行動を起した。

当時、中国は張学良が蔣介石を監禁した西安事件がおこった。この結果、蔣介石は内戦をやめ抗日に向うことを承諾して釈放された。

この情勢のなかで林内閣は突如議会を解散した。その意図は国民に政府支持を表明させようとするにあった。しかし林内閣は、反政府世論に自信をとりもどした政党が倒閣運動をおこしたので、ついに五月三十一日総辞職した。こうして次には軍部と政党の調節を期待して、貴族院議長近衛文麿を首班とした第一次の近衛内閣が六月四日に成立したが、その一ヵ月後には日中戦争が起ったのである。

七月七日北京西南郊外の永定河にかかった芦溝橋の附近で、夜間演習中の日本の支那駐屯軍の一部と、ここを警備していた中国軍との間に衝突がおこった。この局地的な事件を軍部は一挙に拡大し、中国にたいする全面的戦争にのりだした。そして度々失敗した華北の侵略をこの際、達成しようとした。

抗日民族統一戦線に結集した中国は、日本の考えていた短期決戦の見とおしが破れて、次第に長期戦の様相が濃くなった。華北五省と南京の占領で一時停滞していた戦線は、またずるずるとひろがっ

ていった。このころ朝鮮北端の満、鮮、ソ国境の交叉点に近い張鼓峰でソ連軍と衝突し、ひどい打撃をうけた。だが陸軍は主力を中国に投入し、武昌、漢江、広東作戦をすすめようとしていた。

近衛内閣は武漢陥落直後に「善隣友好」「防共共同防衛」「経済提携」の三原則をかかげ「東亜新秩序の建設」をうたい国民政府が抗日容共政策をつづけるかぎり矛をおさめないとの声明を出した。

昭和十三年はじめの議会に政府は国家総動員法案を提出した。すべてのものを戦時体制に編成することを目的とし、労務、物資、資金、施設事業、物価、出版等のあらゆる分野を一片の勅令をもって政府の統制下におくことをみとめ、その後の戦争経済の基礎をかためるものであった。政府はこの法案を提出するにあたって弾圧を行なった。山川均、鈴木茂三郎、加藤勘十、大内兵衛、有沢広己、河合栄治郎、矢内原忠雄氏らが検挙、追放された。こうして強引にこの法律を成立させた。そして国民の心を戦争にかりたてた。さらに国民精神総動員運動が起った。「興安奉公日」(昭和十四年九月一日より実施、毎月一日)を設定し、この日は全飲食店を休業させ、梅干一つの「日の丸弁当」を強制したり、「ぜいたくは敵だ」とのスローガンで、消費節約、貯蓄奨励を、お説教したり、あるいはパーマネントをやめさせ、国民服やモンペ姿を男女の制服化しておしつけたりする「教化」運動に主力がそそがれた。

そして一般物価、地代、家賃等を一定の水準にくぎづけする価格停止令が出、つぎに賃金、俸給等もこれにふくませた。公定価格とヤミ価格、日常物資の切符配給と闇流し、国民生活のいっさいはくらい戦時色にぬりつぶされるようになった。

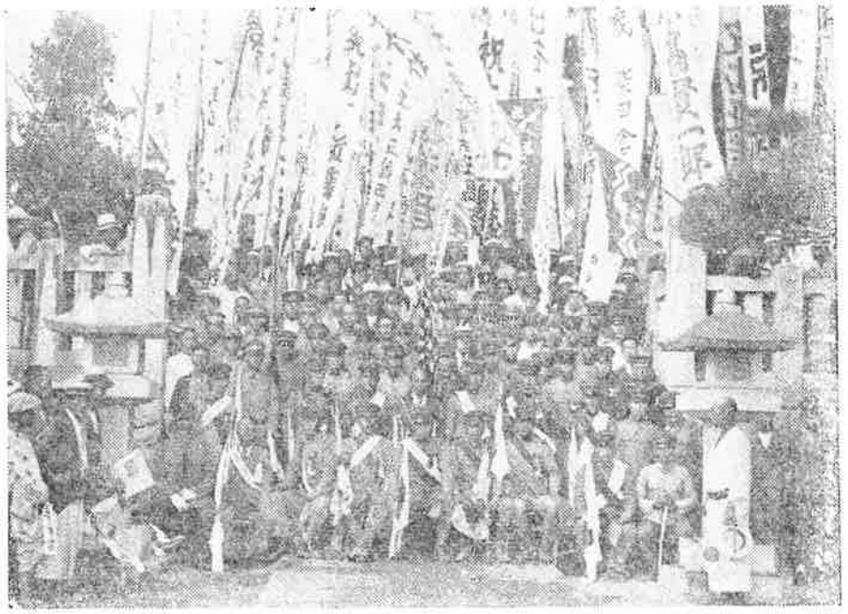
近衛内閣は防共協定を強化して独伊と軍事同盟を結ぶ交渉をおこなっていたが、閣内の対立を直接の原因として総辞職した。昭和十四年一月、平沼騏一郎氏が組閣した。この内閣は三国同盟の方向にさらに前進した。そして五月には満蒙国境のノモハンでソ連軍との衝突がおこった。この事件は日本軍の無惨な敗北で、多数の死傷者を出した。

ノモハン事件と時を同じくして、独ソ不可侵条約が締結された。三国同盟問題について、会議の数を重ねながら結論を出すことができなかった平沼内閣は総辞職をした。このあと阿部信行内閣が組閣された。この頃一宮町としては、いまはその跡が僅かに残っているが、海岸の砂丘に、予備役将校による学生の軍事教練の兵営的生活をするための廠舎が、(昭和九年建設されたもの)、軍用として移管された。そして海岸も軍事に利用されることが多くなった。宮原より湧出の天然ガスが町内にひかれ、県営で東浪見の砂鉄が採取されるようになったのは、それよりさき昭和十二年のころからである。

昭和十五年の正月ころは、「米を大切にしましょう」というビラが見られるようになった。公定価格では木炭は買えなくなり、電力や燃料の不足で銭湯などは休業がつづいた。ガソリン不足であらわれた木炭自動車が薪炭不足にたちまち困り、マッチが店頭から姿をけして貴重品となった。そして六月から砂糖、マッチの切符制が採用され、昭和十六年四月からは六大都市では米の配給制となり、大人一人一日二合三勺と定められた。農村では米の強制買上げ(反当

り四十三円釘づけ)がはじまり、米の買上げ機構が、市町村農会―販売組合―政府の線に一元化され、その後、米穀管理規則実施をもって、米の国家管理が完成された。

満州事変以来九年、日中戦争がはじまってから三年、国民の圧戦



出征兵士を送る家族と町の人々(日支事変)

気分は自然発生的にかなりひろまりはじめた。こうして十五年一月代議士二四〇名は阿部内閣の退陣を決議した。

阿部内閣の退陣後は、阿部内閣の米内光政海軍大臣に組閣が命ぜられた。そのころ中国の戦線は進むに進めず、退くには退けぬという状況で、具体的な戦争目的はいつのまにか見失われ、ただ情勢にひきずられるままになって「事変解決に悩み抜いて」いた。

この状態を収拾する唯一の策としたのは、汪兆銘政権の樹立であった。しかし中国の民心はこれを心からは支持しなかった。そのころ国内では近衛文麿公をかつぐ新党組織の運動が表面化し、活発となった。そして陸軍の圧力で米内内閣が倒れると、近衛が組閣を命ぜられた。閣議では「八紘一宇」の精神にもとづく「大東亜新秩序」の建設と国防国家体制の完成とが定められ、大本営政府連絡会議では武力南進方策の細目と独伊との提携方針が決定された。日独伊三国軍事同盟の交渉がすすみベルリンで調印されると三国による世界再分割とアメリカの欧州ならびに極東の戦争にたいする参戦をけん制しようとする動きを露骨にしはじめた。

このような国際情勢を利用して侵略政策が新たな軌道にのるとならんで、新体制運動も急速にすすんだ。近衛のとった新体制準備会は「上意下達、下意上通」を力説する一方、もっぱら「万民翼賛」「承詔必謹」を強調した。こうして大政翼賛会は発足した。

この翼賛会のもとに翼賛青年団が生れ、産業報国会、商業報告会、農業報国聯盟、大日本婦人会などが作られた。町内会、部落会、隣組のこと、貯蓄奨励、物資節約、公債の割当などの末端運動

もこの翼賛会で推進した。また労働統制が強化され勤労手帳制度と国民登録で労働者は根こそぎ駆りたてられた。このように社会生活のすみずみまでも統制する途をひらいたのである。

勿論、町にもこの会が結成された。議員も政党からはなれて翼賛会の推選によった。任期も一ヵ年延長されて五年その職にあった。

当時の議員は、久我清一郎、大場英二、関谷直治、久我捻太郎、片岡八郎、片岡知哉、浅野文治、小高庫司、富塚市郎、加藤寅吉、森田徳次郎、飯塚吉蔵、石野清、板倉正一、高梨繁之助、土屋倉吉、渡辺清、田中周氏ら十八名であった。

翼賛会の支部長は知事兼任となり、一般軍人の参加を禁じていた。地方ではこの会を通じて古い支配勢力にとってかわろうとする新しい勢力が進出し、地方政治の腐敗や不合理な慣習に若干の改革を試みようとする動きもあらわれはじめ、戦時生活にうんざした国民の心をある程度「新体制」の言葉にひきつけることができたことは否定できなかった。

こうする内に紀元二千六百年記念式典が、全国あげてのお祭りさわぎの中でおこなわれた。

昭和十六年ワシントンで日米交渉が開始された。それは日本軍の中国からの撤退を条件に、アメリカが和平を仲介するための案の検討のものであった。しかし外相松岡はこの交渉をサボっていた。近衛は松岡をやめさせるため七月にいったん総辞職をした。そして七月十八日第三次近衛内閣を組織した。外相には豊田貞次郎が起用されたが、対米交渉より南方作戦の基地としての南部仏印に侵入した。さらに陸軍史上かってない兵力資材の大動員を満州に向けおこなった。この頃の町はもう男は召集がひっきりなしに来ていた。そして九月の御前会議では日本の要求が十月になっても貫徹し得なければ米英蘭と開戦をするということを決定した。すでに開戦は現実の日程にのぼり着々と作戦準備がととのえられた。しかし中国からの撤兵には東条陸相は強固に反対した。この問題で近衛と対立が深まり十月近衛はついに内閣を投げだした。

このあと東条は現役のまま内閣を組織した。日米交渉は米国は強硬な回答のため見込なしとして、十一月二十六日かねてから予定の日本機動部隊は千島を出発してハワイ真珠湾攻撃に向った。英領マレーのコタバルにも上陸を開始した。これら奇襲は国際法無視であった。

太平洋戦争　昭和十六年十二月八日朝六時すぎ「帝国陸軍は本八日未明西太平洋に於て米英軍と戦闘状態に入れり」との大本営発表が、突如ラジオの臨時ニュースで流れた。正午には天皇の宣戦の詔書が放送された。

緒戦の戦果は予期以上のものであったので戦争への不安が忘れられてしまった。翌十七年には広大な南方地域が日本軍の占領下に入った。しかしこの勝利は長期戦の敗因をはらんでいた。四月十八日、アメリカ爆撃機十六機が空母から飛立って東京などを空襲した。その実際上の効果はほとんどなかったが、本土防衛の完璧をほこっていた手前、また帝都がおそわれた体面にこだわり、本土対空哨戒線をもっと東にひろげるためのミッドウェー島攻略を六月五日

に行ったが、これは惨敗した。上陸に失敗し、主力航空母艦を撃沈され、飛行機と熟練した飛行士の大半を失い、その後この損害の補充がつかず、海上での彼我の立場は逆転してしまった。

八月七日ソロモン群島のガダルカナル島にアメリカ海兵隊が上陸してからは、ニューギニア方面で逐次後退をつづけ、さらにアリューシャン方面でもアメリカ軍がアッツ島に上陸し、日本軍は玉砕した。拡大された中国、南方戦線から次第に後退をせざるをえなくなった日本軍は、戦争経済のゆきづまりとともに、敗戦への途をたどりはじめた。

敗色が濃くなったころから東条内閣による国内の圧政はますます激しくなり、いっさいの自由主義的言論や行動は弾圧され、内閣や軍部の行動に対する批判は禁止され、多くの人々が憲兵や警察の手で投獄された。

昭和十八年には学徒動員戦時体制が確立された。米軍の反攻に直面して軍需生産の増強がいよいよ急務になると、鉄鋼、石炭、軽金属および航空機、船舶の産業にいっさいの資材、設備、労働力を注ぎこまねばならなかった。そのため六月より民需産業の徹底的企業整備が行われ、その設備はとりこわして金属回収にむけられた。町にあってもこの企業整備のため店を閉めて、航空機生産のため徴用工として働きに出るものが多かった。こうしても労働力の補充は間に合わなかった。そのため教育がぎせいにされ、中等学校以上の生徒に勤労員が実施され、満十二歳以上四十歳までの未婚者によって女子挺身隊が組織され、軍需工場に長期動員された。しかも労働力の不足は農業に大打撃をあたえた。戦争がもたらす農業生産力の破壊をふせぐ力もなく、食糧危機は戦争体制の命とりとなった。この頃、国債貯金、弾丸切手、婦人会貯金、町会国民貯金等が強制的、半強制的にやられた。

こうしているうちに米軍の反攻は予想をうらぎって、急速かつ大規模なものであった。

十一月にはマキン、タラワ両島が占領され、昭和十九年二月にはマーシャル群島に上陸され、ついでトラック島、三月にはパラオ諸島がおそわれ、六月には要地サイパン島に米軍が上陸した。陸軍はビルマ方面で無謀なインパール作戦をおこなったが惨澹たる結果におわった。

このころ一宮町には突然、一宮駅から海岸まで鉄道の引込線がひかれた。この工事のために多くの工事関係者が入りこんできた。町の人たちも多数が交代で勤労奉仕して、またたく間に工事は竣工した。これと同時に字南陣所に兵舎が建設され、肥田野部隊（肥田野百一大尉）と陸軍兵器廠が設置された。この部隊は陸軍の気球隊の一部で、目的は気球に爆弾や焼夷弾を装置して、大気圏まで上昇させ、そこを流れている上層気流に乗せてアメリカ上空まで送り、無電操縦によって爆弾を落すという日本の新兵器の発射を行なうためのものであった。この新兵器はアメリカでも驚いたらしく、終戦後これによるアメリカ側の被害状況がリーダースダイジェストに発表されていた。しかしこの発射地も敵にわかって移動をしなければいけなくなった。それは気球がアメリカで突然、爆弾や焼夷弾が落ち

て、山火事が起きたので、よく調べてみると、紙きれが落ちてくるので、風船爆弾のことがわかり、しかもその風船の残片には、玉前神社や香取神宮の御札や成田の新勝寺のお守りが、はりつけられているので、大体の発射の地方がわかってしまった。

この風船爆弾は和紙で大きな風船を作り、その表面にコンニャクの液を塗り、雨にあっても差支えないよう防水をさせ、それに熱誠こめて神社、仏閣の御守札を貼ったのがかえって基地を知らせる結果となった。このためばかりではなかったろうが肥田野部隊は二十年六月富士裾野へ移転してしまった。この肥野田部隊とほぼ同時に、近衛師団を中心とする範部隊（長沢正美大佐）が、進駐してきて一宮附近の山に横穴を掘り陣地を構築した。この時も町民は多数が毎日交代で、軍隊の穴掘の応援の勤労奉仕に出た。

昭和二十年一月米軍がフィリッピンのルソン島に上陸し、二月にはマニラ市に突入した。こうして南方ルートはほとんど断ちきられた。これに先だってサイパン基地のB二九は本土の来襲を開始した。当初は主として東京附近の工場地帯を爆撃していたが、三月九日夜東京大空襲以後は、大編隊をもって焼夷弾による夜間無差別都市爆撃をすすめてきた。米軍はついに硫黄島に上陸し、日本軍は激戦の後に玉砕した。硫黄島占領後はここから発進するP五一戦闘機をもって日本空襲を援護するようになり、空襲は大規模になった。ついで四月には米軍は沖縄本島に上陸した。

この頃は一宮の上空でも空中戦が行なわれた。そして日本の飛行機が撃墜され、下村部落の田の中へ墜落爆発して、搭乗員が二名即死した事件があり、またアメリカの飛行機が茂原の航空隊を攻撃している時、関東台部落の人々がそれを山中で見ていたところ銃撃され一人死亡一人は負傷をした。

また一宮川を堰止る汐止の水門を発電所と見違えたか、よく銃撃の目標になり、七月四日には数軒の家がうち抜かれ、二軒火災を起したことなどがあった。この最中に範部隊は山武郡方面に移動し、代って北海道旭川師団の護北第二二四五四部隊（田村禎一大佐）が進駐してきた。この部隊の一部が茂原に墜落したB二九搭乗員を斬殺し、終戦後最初にその裁判が行われた。護北部隊は睦沢村岩井の妙勝寺を本部として一宮の山中到るところに陣地を構築し、地方民の援助をうけず山中に小屋がけして本土決戦の態勢をととのえつつあった。

一方、築城本部から派遣された栗田隊は、明治二十六年製の臼砲を一宮の娶沢山中に構築した陣地に据えいよいよ決戦近しをおもわせた。一宮の上空は敵機の通路にあたり、殊に硫黄島が陥落してP五一戦闘機が来襲するようになると、警戒警報が発令され、空襲警報が出ないうちに敵機が当地の上空を通過し、その後で空襲警報が発令されたことも数度あった。

当時は汽車に乗るには切符も極度に制限があり他には旅行ができなかったし、風船爆弾の発射地であった間は士気から長者町までの間、ヨロイ戸を閉めさせられ、郵便葉書も制限売りをするようになった。進駐してきた兵隊のうち銃をもたないもの、剣のないもの、下駄ばき、地下足袋、藁草履をはいて歩くように、惨めなものであった。七月になって千葉市が空襲され、死傷、家屋の焼失が莫大であったころ一宮海岸近くに、故障の敵機が墜落した。搭乗員は海上に脱出して泳いでいた。海岸にいた軍人は射撃しようとしたが許されずそのうち敵の潜水艦があらわれて救い上げ、帰り途に白潟町（現白子町）を艦砲射撃をし引上げていった。このとき死者数名を出している。この時、海岸には沢山の兵が配備されていたが、なに一つなし得なかったことが一般に知れ、また敵機に高射砲も撃たず、これで戦はどうなるかという非難が軍に向けられていた。敗戦の様相が一宮駐屯部隊の上にもあらわれてきていた。風害のため観明寺の建物が崩壊したのもこのころのことである。

国民不満の声がたまってきた東条内閣は、後退に後退した敗勢をもりかえすことができなく内閣を投げ出し、小磯国昭大将を後継首相にした内閣ができた。しかし急迫する戦局に小磯内閣はなんらの手もうてなかった。重臣、軍部にも戦争終結をはかろうとする気運がひそかに流れはじめていた。小磯内閣の総辞職につづいて鈴木貫太郎が内閣を組織した。「本土決戦」「一億玉砕」が呼号されたが、爆撃は日に日に激しくなり、住宅はもちろん、衣類さえも支給されず罹災者はあるいは焼跡の防空壕に住み、あるいはわずかの縁故をたよって避難していった。加えて食糧事情の悪化はいっそう甚しく、十九年の一般の平均カロリー摂取量は、生存の最低必要量二、一六〇カロリーを相当下廻っていたと推定されるが、さらに二十年夏には麦、イモ、高粱などを含めて一日二合三勺の配給が維持しがたく、七月から配給量は一割削減された。国民は戦意どころか、自分の生きていくことに精一杯であった。

七月二十六日には米英中三国によってポツダム宣言が発せられた。日本軍の無条件降伏、軍国主義の除去、日本の保障占領、領土の限定、日本軍の武装解除、戦争犯罪人の処罰と言論、宗教、思想の自由ならびに基本的人権の尊重、平和産業の維持をめざすことを明かにしたものであった。しかしこの宣言を受け入れるかどうかについては政府内においても意見が分れた。そして降伏の意を固めず、相かわらずぐずぐずしていた。八月六日午前八時十五分アメリカで完成したばかりの原爆が、B二九によって広島上空に投下された。この爆弾も原爆ということを知らせず「新型爆弾」と発表し、本土決戦に狂奔しつづけた。

このころ町では敵の機動艦隊が房総沖に現れるという情報で、一般町民は兢々としていた。八月九日夜、房州白浜に艦砲射撃があり、町にもその危険があるという役場の警告に、ほとんどの家が夜中に山中に避難した。十日ごろから十三日にかけては、敵機がひっきりなしに飛来してきて、八積駅に停車中の列車を機銃掃射し、駅附近に大火がおこった。町でも数ヵ所爆弾が投下されたが、一発は一宮橋をねらって落したものが物置を破壊し、鉄橋をねらったものは泥田の中に落ち、神社の近くに落ちたものは幸い炸烈しなかったから被害はなかった。

ところが満州にあっては八日深夜、ソ連は対日宣戦を布告し、九日未明満州に進撃をはじめてきた。そしてその日、長崎にも原爆が投下された。九日深夜に開かれた御前会議ではポツダム宣言受諾が決

定した。そして、八月十五日には天皇の降伏の言葉が放送された。この降伏発表の前の十三日のお盆では、生霊迎の提灯もつけられず、また仏壇の灯も点じられなかった。明けて十四日には空襲の数回も減り、ようやく夜になって新盆の家に線香などあげに行けるようになった。

終戦後の様相　八月十五日正午、天皇の終戦の詔勅が放送された後は、殆んどの人が虚脱の状態に陥って、仕事も手につかなかった。殊に駐屯の軍隊は、昨日まで肩いからしていた将校下士官の意気が消沈したのに対し、兵隊の顔が晴ればれしくなったのが対照的であった。翌十六日、防空警報は解除され、電灯も自由に灯されるようになった。

数日後、マッカーサー元帥以下が日本に進駐するということで房州に駐屯の日本軍隊は撤退を命ぜられ、その軍隊が当地へ来て民家に分宿した。それもあとからあとからひきあげてくるので、町はふくれあがった。徒歩で通過するものもあったが、汽車は超満員、客車の屋根にまで兵隊が乗っている有様で、その屋根にいて一宮駅のブリッジに頭を打たれて死亡した兵隊もあり、こんなことから敗戦がようやく身に感じられて来た。

やがてマッカーサー元帥以下が厚木飛行場に到着、それと前後して館山に進駐して来たアメリカの海兵隊が日本婦人に暴行したという噂が飛び、婦人に非常な不安を与えた。

この時町役場から回覧板でアメリカ兵が来たら口をきかないように、女子はかくれてしまうようにという注意があった。一方官公署は、重要書類の焼却を命ぜられ、焼却に大童であった。

昭和三十八年十一月十日の毎日新聞の思い出の欄に、終戦当時、長生地方事務所長であった野中勘介が、終戦当時の思い出として書いた次のような記事がある。

「アメリカ兵が来て、茂原の水源を案内しろというので自分が長柄村の水源地まで同行すると、附近の人はアメリカ兵を見て一さんに逃げてしまった」

十月下旬、一宮海岸で火薬の処理が行なわれ、爆風によって町内各所でガラス障子が破損した。この時は消防団がかり出された。

戦後成立した東久邇内閣の森農林大臣が議会で食糧の不足を訴え、日本人が一千万人餓死するだろうと報告した。そのため国民の不安は募るばかりであった。

そればかりではなく、日本中の都市は大部分空襲に遭い、工場の罹災も多く、罹災を免かれた工場も原料の欠乏や、賠償に日本中の機械を撤去して中国へ渡すなどの流言から工場を捨て帰郷する者、戦災で家を失なった者の帰郷および復員の軍人で、人口が四割増加した。その上食糧の買出部隊が入り込み、闇取引が流行、食糧管理法違反で検挙される者があとを断たなかった。町では空地を全部開墾して食糧の増産を奨励し、それでも足りなくて、海岸の町有林を伐採して市街地の各区の共同畑を開墾し、甘藷の植付を行なった。

この急増の人口と、一方他から買出しに来る人のために食糧は欠乏するばかりで、二十一年の夏には芋床の蔓を取ったあとの種芋まで食糧として配給した。

昭和二十三年頃アメリカから救急の食料が輸入されて配給された。その食糧は大豆と大麦で、大麦は牛馬の食糧のような物で、これを食べると「ヌガ」がとれていないので腹をこわす者が多く、動物の餌にするか、または自家で製粉にしてスイトンにして食べるより仕方がなかった。町民は、海上郡の飯岡附近まで甘藷を買いに集団で出かけていった。

その豆や麦がなくなると、今度は、赤ザラメ糖が米の代りに配給された。米のカロリー相当カロリーを砂糖でとれというのである。

この砂糖を農家へ持って行き、米や麦その他の食料と交換して栄養を保ったのである。

町民の多くは、金、銀、衣類を金にかえ食糧の入手に狂奔しなければならなかったので筍の生活とか、玉葱（皮をむくたびに目にしみて目から涙が出るという）生活だといわれた。

マッカーサー元帥の率いる占領軍は、日本政府に対して、矢継早にいろいろの指令を出した。そのため日本の政治、経済、文化の面は俄かに一変した。

まず政治の面では、議会制度、選挙制度が根本的に変えられ、婦人にも参政権、選挙権、被選挙権があたえられた。一宮町の農業委員会の委員の選挙に際し、話しあいで選挙を行わないで委員を決めたことがあった。その時は、占領軍から選挙をしなおさせられた。

経済の面では、財閥の解体、株式の民主化、地主の抹殺、財産税、金融緊急措置令の実施、財界実力者の追放等がなされた。

文化の面では、左翼系文書の発売禁止を解き、逆に右翼系の図書の発禁を行ない、浪花節、講談等を圧迫し、思想面では、左翼の拘禁者を解放し、労働組合の結成を助長した。新聞記事にまで干渉したといわれている。

信仰の面では、神社神道を国教から除かれ、武道も剣道が禁止された。

昭和二十一年十一月、国民に主権のあることを認めた憲法が生れ、翌二十二年総選挙が行なわれた。そして第一党になった社会党と民主党、国民協同党の連立内閣が組織された。この選挙で、宮原から立候補した竹内歌子という無名の婦人が当選した。やはり、婦人の票をあつめることができたのである。

一宮町においては、この年の四月に新憲法による初めての公選町長の選挙が行われ、田中周が当選して初代町長となった。また議会も新憲法のもと選挙され、町執行部、議会が町民の選挙によって町政の運営にあたることが実現した。その初代議員は、

泰彦文、大場英二、片岡知哉、浅野文治、吉野藤吉、清水孝平、田中敏、田中和吉、田中定治、伊藤愛司、土屋知夫、近藤三郎、原田孝、加藤市作、鶴岡七郎、石井周蔵、丸島隆作、渡辺市次郎、永島嘉男、金沢駿逸の諸氏であった。

終戦後終戦処理に乱発された紙幣と、物資の欠乏による物価高からインフレの風が吹きまくり、朝買う物と夕方買う物とでは同じ品で値段が違うほど物価が騰っていった。一宮に在住の退職官吏で、高等官一等で退職した人が、雅号を南五道人と改めたのでその理由を尋ねたら、私は南瓜五個と同じ価値の人間であるからそのように

改めたという。その理由は、その人が国家から受ける恩給の額を一日に割り、その額では南瓜が五個しか買えないという。国の最高の官吏をした人の恩給一日分で南瓜が五個しか買えないほど、インフレが昂進していたのである。

インフレが昂進すると、貧豊の差が顕著になってくる。農家でも人手の多い耕作面積の大きなものは益々富み、これに反して人手の少ない、耕作面積の少ないものは延びられない。ところが小作農家で人手の多い家は、農地改革によって僅か米三升ほどの値で田一反歩入手出来たのだから、新興農家が大いに台頭し、旧地主や、旧からの自作農で戦死者を出した家庭などは手不足のために凋落せざるを得なかった。

一宮は、明治大正頃県下で最も富有の町といわれていた。その町が戦争中の物資統制により商活動が思うようにゆかなくなり、戦後は農地改革により地主の商人がなくなってしまった。かって茂原の商人が一宮の商店から物を仕入れていたものが、戦後は一宮の商人が茂原へ商品を仕入れに行くようになってしまった。

統制によって農村にあった商人の力が増し、物資を充分に仕入れておく能力が出来たことと、バスが茂原を中心に各地に通じるようになって一宮へ来る人が減じてしまったことが、一宮商店の一つの大きななやみである。

それやこれやから、宮原から上宿の端、横山町の外れまで続いていた商店も、段々減少して来た。そこへ昭和二十九年に起った宮原、新地の分村に端を発した長生村の不買同盟のため、一宮町の商店から買入れていた長生村の顧客が、茂原の商店から買うようになって、一宮の商店には深刻な打撃となった。

一方海水浴は、二百軒もあった別荘が、終戦により所有者が斜陽族となり、その上別荘地が農地改革によって人手に渡ってしまうのもでき、別荘がなくなってしまった。元総理大臣斉藤実の別荘も遂に立ち腐れとなって崩壊した。その後新たな別荘が建ちはじめて来たが、戦前の繁栄に戻るのはいつのことか。

それよりさき、一宮町在住前明治大学総長志田鉀太郎、その広大な所有地を千葉県に寄付したので、県ではそこに林業指導所を設置し、林業の指導を行なっている。

昭和十三年大川端から一宮ホテルまでの県道が舗装されたが、その他の県道は砂利道で非常に不便であった。戦後自動車が急激に増加して、道路の整備は急務とされながら、それはなかなか進行しなかった。県道が国道に変更されても、国道とは名だけで町内の舗装道路も穴だらけ、雨降りにはその穴へ雨水が溜り、それを自動車がはね散らして通行人は泥水をかけられて困った。昭和三十一年九月宮原の大橋が鉄の橋に架けかえられた。それに伴って宮原の国道も盛土して高くして舗装を行ない、同時に一宮町大通りの舗装も二十年ぶりにやりなおされた。

一方大鳥居前から一宮駅迄の県道、ホテル前から一宮駅までの県道も舗装され、神社前、陣屋通り、一宮駅から上ノ原迄の町道も簡易舗装され、昭和三十六年には権現前の国道が舗装、引続いて権現前から釣に舗装がのび、同三十八年には権現前から大村に至る間、

一宮中学校下、宮原の新道路の舗装が行なわれた。

また一宮町は、古くから商工会を組織して商工業の発展に寄与していたが、観光事業には関心がうすかった。同二十四年これが発展を期し、観光協会を発足せしめ、東京に近い観光地として、海水浴場として都人士の吸収につとめた。千葉新聞社の主催により、同二十五年、房総十二景二十勝の投票が行なわれたが、そのとき一宮海岸は、十万余の得票を得て房総十二景のうちに選ばれた。

同二十一年千葉県下を御視察の天皇陛下は、玉前神社の宮司を召されて神社に金一封の幣帛料を賜り、当地御通過の際は、町民、学生、生徒が鉄道沿線に並び、御召列車の御通過を見送った。

同二十三年三月皇太子明仁親王殿下は、学習院御在学中、千葉県下を御視察、当地に立寄られ、玉前神社で休憩された。

教育の面では、学制改革によって六三制になり、小学校は六年、中学校は三年の課程になった。その発足当初は小学校に併設であったが、さらに別に中学校を建築するようになり、敷地を当時一宮実業学校（現商業高校）後援会所有であった一宮町西門前台に五千七百余坪をゆずり受けここに決定した。東浪見にあっては、講堂を区切って四教室として使用した。その後小学校々庭内に建築がきまり四百二十万円でたてた。一宮町では供米、六三制中学校の建築に尽力された田中周町長が病気のため就任一年で、辞任し、公選二代目町長として大場英二が当選して、この中学校を手がけることになった。資材が不足であったので新築の校舎はとても望めなかったが、海岸にあった軍関係建物を払下げまず第一棟を建てた。その後建増し、現在のような中学校としての規模を作るにいたったものである。

また警察制度も大いに変り人口五千人以上の町には、自治体警察を設置するようになった。一宮においても初めは国家警察庁舎内において事務をとっていたが、これを分離して、昭和二十四年二月に現役場庁舎隣りに新に建設し、ここに移転した。初代の自治警察署長は鈴木実、警察運営委員は関忠四郎、小林高次、斉藤克己の三氏であった。この自治体警察も各町村とも経済的に困難になり、この結果は町民の意志によって存廃ができるようになり、町でも廃止することに決定し、同二十六年九月多数の投票により廃止した。

なお旧役場跡はそのまま放置されていたので、これを改造して保育園に活用すべく厚生省、県児童課に上申し、許可を得て同二十五年一宮保育園として発足した。この翌年の三月に現在の検察庁一宮支部ができ、法務局も自治体警察署の跡を使用するようになった。朝鮮に戦争がはじまったのもこの頃である。そして日本経済は戦争景気に見舞われた。

ここに新憲法による公選町長と議員の間に、確執が起き、時の町長大場英二と議会が対立し、町長は議会を解散して、退任（在任三年七月）した。

その次に近藤三郎が町長になった。日本の地方自治体では供米、六三制を中心として、地方体が財政難に陥りつつあったので、これを町村の合併によって救おうとする気運が、高まりつつあった。一宮も周辺の村に、機会あるごとにこの合併を呼びかけるようになった。